
（仮）悪いのは誰？

芽緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（仮）悪いのは誰？

【Nコード】

N3031X

【作者名】

芽緒

【あらすじ】

召喚された勇者が魔王を滅ぼして3年後、聖国は崩壊した。絶望した勇者、勇者を裏切った王女、2人を守れなかった騎士。悪いのは一体誰？救いの一切ない、只管シリ阿斯なお話です。

初ファンタジーの習作になります。中編5〜8話予定。

プロローグ

世界の破滅を導かんと手を伸ばした魔王は、異世界から召喚されし勇者の手によって滅び世界は平和を手にしたはずだった。一体誰が気付けただろう。魔王が滅びてたった3年後に、四方や聖国が見るも無残に滅びてしまうことを。

勇者召喚を行い、世界を守った聖国はこの世界の中心と呼ばれる程の力ある国であった。それも最早過去の話。それを見てある国主は愕然と恐怖に震え、またある国主はさもありません、とほくそ笑んだ。彼らはそれぞれに噂を掴み囁き合う。

国が滅びた原因は、一体誰にあるのか。

「召喚された勇者様が権力欲しさに聖国の姫に反旗を翻した」

「本当の所は姫様が勇者様を利用した上手ひどく裏切ったとか」

「いや、本当は2人を手玉に取った悪い男がいたらしい」

それぞれに囁かれる噂は、どれも真実味がなく浮ついた物ばかり。滅びた国の醜聞は民達に一時の話題として提供され、年月を経て次第に風化していった。真実など、誰の耳にも届いてはいない。

—— やつと、時が巡ってきた。

男は独りほくそ笑む。これで彼の望みが叶うのだ。多くの犠牲を経てようやくここまで辿りついた。

今まで何度も何度も同じことを繰り返し、失敗を重ねてきた。まさか、“国1つ程度”の犠牲で十分だとは……。何年も、何十年も

犠牲にして彼はようやく迷路の出口をその視界に捉えることが出来た。

これで、苦しいだけの生活は終わりだ。私は解放される！

男は歡喜に緩む顔を隠しもせずに扉へ手をかけた。

プロローグ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

勇者と呼ばれた少女の話 1

あの日、あたしはいつも通りにバイト先のスーパーから家に帰る途中だった。段々日が落ちるのが早くなる空を見上げながらそろそろ暖房器具を押入れから出そうかな、なんて考えて一步を踏み出す。何かに躓いた、と思った瞬間にはもう遅かった。

目の前を猛スピードで光が駆け抜けて世界を真っ白に染める。倒れる瞬間にちよつとだけ見えたアスファルトが、まさかあの世界最後の思い出になるとは思わなかった。

そこで、あたしの人生は180方向転換した。あたし自身には、全く関係の無いところで。

目を開けて、最初に見えたのは美少女だった。どう説明すればいいのか分からない位、あたしの頭の中に入ってる言葉ではとにかく言いつくせない可愛さ。金色の髪がふわふわした、くりんと丸い空色の目をした女の子。あたしと同じ位の。高いお人形が着てるような、ふわふわひらひらしたドレスが凄くよく似合っていて。

女の子が自己紹介を始める前に、あたしは「ああ、お姫様がいる」ってときどきしながらチラ見してたんだ。

その子は凄く真面目な顔をして、こう言った。

「世界を救って下さい、勇者さま」って。

あたしは勿論こう答えた。「はあ？何言ってるの」ってね。よく見たら、その超絶美少女以外にも周りに怪しげなのがわらわらいて、全員が全員、真顔であたしを見てる訳。そっちこそ何言ってるんだ、って言いたげに。その日は何も分からないうちに豪華な部屋に案内されて、早々に部屋に閉じ込められた。

ドアを何度叩いても、人を呼んでも、その一日ドアが開くことは無くあたしは混乱して、気が狂った見たいに凄く騒いだような覚えがある。今思い返せば、あの時皆はがっかりしていたんだと思う。自分達が頑張っって呼んだ勇者って奴があたしで。事情は分からないまでも、あたしの返事を聞いて女の子が困った顔をしたのだけは分かった。

次の日、あたしはあの御姫様に呼ばれたとかでやっと部屋から出してもらえた。無駄に重くてキラキラしてるドレスを着せられて、カリカリしながら引き立てられた先で信じられない話をされる。

あたしは、いつの間にか異世界に召喚されていたらしい。

まるでゲームの中みたい。あんまりにも真実味がなくて、ぼんやりする頭で何とか相手の話を聞いては見たけれど。この世界には魔王がいて、それがとっても強いから自分達の力では倒せないんだって。だから魔法で魔王を倒せる勇者を召喚した。それが、あたしだと。

説明聞いたらますます訳が分からなくなっって、逆に質問しちゃったよ。あなたたちはあたしがそんな特別な力を持った、勇者なんぞに見えるのかって。そうしたら、一番偉そうな椅子に座った人——あとあと、あれがお姫様のお父さんである国王だと教えてもらうんだけど——が異世界の勇者はこっちの人とは比べ物にならない魔力があるんだって教えてくれた。

だから？特別な力があるから、勇者になって身も知らぬ人達のために命捨ててこいって？そんなこと、出来る訳ない。私は勇者じゃない！何で私が魔王なんかと戦わなきゃならないの！？今すぐに、あたしを元いたところに帰して！

そう口にした瞬間、あたしに向けられたのは冷たい視線と、刃物だった。首筋に触れたモノが固くて冷たくて、ただただ怖くて。震えることも出来ずに立ちつくすあたしの前で、王様は不釣り合いな位につこりと綺麗に笑った。

「勇者でないというならば、貴様は一体何者だ。侵入者か？」

頭の悪いあたしでも、分かる。あたしには最初から2つの選択肢しか用意されていなかったんだって。魔王を倒しに行って死ぬか、この場で刺し殺されるか。刃物が突き付けられていることも忘れて必至に首を横に振る。

怖くて、怖くて、部屋に戻ってから泣き続けた。帰りたかったけど、あの時のあたしは廊下に1人で出ることすら許されなくて。次の日になったら当然の様に剣を持たされて騎士団の中に放り込まれた。勇者ならばすぐに身に着くはずだ、と。そこにいた男の人達の間は凄く怖くて、あたしを嫌いだって声に出さなくても伝わってきた。

そりゃ、自分達が一生懸命頑張って手に入れた場所に素人の女がこのこ出てきたらむかつくのは分かるよ。でも、あたしだって好きでここに連れてこられたわけじゃないのに。

毎日、必死だった。相手をしてくれる男の人は皆「ちょっと手が滑って」なんて言い訳であたしをどうにかしようと思ってるのが見え見えで。殺されないように何とか刃物を奮っていたら、本当にいつの間にか、剣をそこそこ振るえるようになっていた。勇者様なのは、そういうモノらしい。

それでも皆の目は変わらない。疎ましがってたのが、今度は怖がられるようになっただけ。あたしは、ここにいる限り勇者でそれ以外の物にはなれないんだ。そう、思ってた。

皆が手を差し伸べてくれた、あの日までは。

勇者と呼ばれた少女の話 1（後書き）

今回の目標

- ・ 文を短く纏める
- ・ 主人公に応じて文体を変える

……既に1つ目の壁にぶつかっていますが。
読んで頂きありがとうございました！

あれはいつだったかな。確か魔法の訓練が始まって、疲れて早目に寝ちゃった日。真夜中にふっと目が覚めたんだよね。部屋は豪華な癖に、窓にしっかり填まった鉄格子を見て思ったんだ。部屋は真つ暗なのに、外から差し込む月明りでぼんやりあたしの腕が見えて手のひらはタコが出来て、腕も傷だらけで。そんなあたしを見たらお母さんがまた怒りだすかな、なんてとりとめなく考えているうちに。

死んじゃおうかな、って。

魔法を習いだして、大抵のモノなら壊せるようになった。今ならあの鉄格子だって簡単に壊せるはず。そう思って窓に手を伸ばした時。突然、ドアの方からノックの音がした。

ぼんやりしたまま「どうぞ」って返事して、ドアがゆっくり開いた。いつもの見張りかと思ったら、違った。

あの召喚された日以来、会ってなかった金髪の王女様がそろそろと顔を出した。その時はびっくりしたなあ、明りの無い部屋なのに、金髪が光ってるみたいに浮き上がって見えたから。彼女はあたしを見るなり頭を下げた。

「貴方様の苦しみ、痛み、何もかも全ては私達の責任です。思いに出口が見つからないとおっしゃるならば、どうぞ全て私にお向け下さいませ。その為にご自身を傷つけることはありません」

最初はただびっくりした。何で分かったの、って。次にじわじわ湧き上がってきたのは、抑えてた気持ち。あたしが家に帰れないのも、変な化物と戦う訓練させられてるのも、周りの人間にまで狙わ

れるのも皆、あたしを召喚したこの国の所為だ。

誰かが見張ってるかも、とか本当はあたしを騙してるかも、とかそんな気持ちも全部吹っ飛んだ。無抵抗の王女様を貼り倒して、転がったところを胸倉掴んで圧し掛かる。

何であたしなの？どうして、あたしはこの国を助けなきゃなんない？助けてほしいって言う癖に、あたしを殺そうとするのは何でなの？どうして、どうして！！

思ってたこと、全部をぶつけたと思う。それでも王女様は抵抗しなかった。

「申し訳ありません。私にはどうすることも出来なくて……」

王女様の呟きに、ちらりと耳にしたことを思い出す。魔王討伐にこの国から近衛兵が出ない理由。異世界の勇者が特別な力を手にしているように、魔王もこの世界の人とは比べ物にならない力を持っているんだって。何度闘っても味方がどんどん死んでくばかりで、どうしようもないから態々召喚なんて面倒くさいことをして、勇者を招くんだとか。

「魔王を倒した暁には、貴方様の願いを何でも叶えます！　ですから、どうか魔王を倒すためにお力を貸して下さい！」

正直、知った時はだから何だとしか思わなかったけど。あたしの下で、顔を腫らしてじっと動かない王女様が何でか泣きそうな顔に見えて、何も言えなかった。

この人達は、いや、少なくとも王女様は本当は自分達で何とかしたかったに違いない。国の危機、なんて一大事に他人に大仕事を任せる不安もあったに決まってるのに。

その時かな。お姫様の言葉を信じてこの国のために闘ってもいいんじゃないかな、と思ったのは。

王女様は、確かに何でも願いをかなえると言った。彼女なら当然知っているはずだ。あたしが何を願うか。それでもはつきり口に出したんだからあたしを元の世界に帰すことなんて簡単に出来るんだろう。あたしはゆっくり、見逃してもいいよって思いながら小さく首を縦に振った。

王女様はその後、只管頭を下げて謝って。これからはあたしの今の状況を良くするために頑張ると言ってくれた。その次の日から劇的にあたしの現状は変わったり……はしなかったけれど、王女様の頑張りはこちらほらと感じられた。

例えば、騎士団の人達。前は「隙あらば！」って感じだったのが、少しずつあたしを認めてくれたみたいで指導後にちらっとアドバイスをしてくれたり、こそつと誉めてくれるようになった。闇打ちらしきモノも、殆ど無くなった。

特訓にも休みの日が出来て、王女様が直々に現れては庭や城内を案内してくれた。城下へ行く許可も取ってくれるとは思わなかったけど。勇者様にだって息抜きは必要です、とこっさり笑って。

本当はお姫様があたしの所に来ること自体、城内の人達は反対してた。影に隠れて注意されてるところ、何度か見たことあるもの。そのたびに王女様は言ってくれたな。何故この国の王女が、国を救って下さる勇者様から身を隠さねばならないのかと。

可愛らしい容姿で胸を張る、そのきりつとした姿勢があたしを救ってくれた。

その王女様が庭のお茶会で紹介してくれた人が2人いる。私が心

から信頼する人達だからご安心を、と。その頃にはあたしが王女様以外の人を信用してないって、どうも知られているみたいだった。

1人は、お姫様のお兄ちゃん、第一王子。お姫様と同じふわふわした金髪に、青い目で細身のイケメン。あたしが向こうの世界で思い描いていた王子様そのものだ。

じゃあ次の王様になる人だ、と思ったらどうも次の王様は王女様で決まりとかで。王位を継ぐのは性別じゃなくて王族に伝わる力のあるなし、らしい。特別な力ってなに、と聞いたら王女様は気恥ずかしそうに笑って、内緒、って言われた。残念。

王子様はあたしが魔王との戦いに行くとき、ついてきてくれることになっていた。何でも魔法だったらこの国では1番なんだって。

とにかく優しい人だった。自分達の国を守ってくれと叫ぶばかりの人達の中で「私を守る」ってはっきり言ってくれた人。

目の前で跪かれて手の甲にキスされた時は、思わず顔真っ赤になっちゃった……。だって、やけに真剣な顔で言うから。別に他意はない、はず。皆ときめくでしょ。あんなの。

もう1人は、王女様付きの騎士様。あの人、最初は嫌いだったんだよね。こっそり私に会いに来る王女様から隠れていつもあたしのことを窺ってた。訓練して人の気配に敏感になっていたから、すぐに居場所なんて分かるのに。

あの人、私についてくることになっていて。王女様が自分がついていけない代わりに、自分が動かせる近衛兵の中から1番の人を選んだと言っていた。会ってみれば王子様とは間逆にがっしりした体つきで、短く切られた黒髪がやたら硬そう、強面の人だった。

反対なのは見かけだけじゃなかった。王女様が城下への外出許可を取った時護衛として彼が選ばれたのだけれど、彼が真っ先に案内

したのは城下一美味しい菓子屋でも流行りの洋服店でもなく、王都の片隅にひっそりある貧民街だった。

知らなかったんだ。両親、特に父親が死んだ子供がこの国でどんな扱いを受けるか。

この国では父親の名字を名乗るのが普通で、もし父親が死んだ場合名字を奪われ、その存在は戸籍から消える。新たな名を得て使用人になればマシな方、最悪その……体目的に買われる子供も多いらしい。先だつての魔王領への調査で亡くなった兵達の子供もこの中には沢山混じっているんだと、彼は悔しそうに言った。

それじゃ、兵達だつて戦いには行きたくなくなるに決まってる。自分が死んだら子供まで酷い目に会うんだから。

いろんな理由ががんじがらめになって、この国の人は戦えない。そんなことを知ってしまったら、あたしだつて簡単に自分達で行けとは言えないじゃないの。

現実を知つて茫然としてるあたしに、彼は言った。王子様と同じように膝をついて礼をしながら。

「どのような理由がこちらにあれど、無関係の貴方を巻き込む理由にならないことは承知の上。我等はこうして膝をつき貴方に希いながら、魔王を殺す道を強要する他ない。我らを怨んでも構わない。魔王さえ打ち滅ぼしてくれたならば、私は貴方の望む全てを叶えるために尽力することを誓う。名前も地位も命さえも、全て貴方の望みのままに」

あたしに伝えたいことはあの夜の王女様とそんなに変わらない。ただ王女様よりあけすけで、何の遠慮もなく、誤魔化しの言葉すら選ばなかった。

この国で、心からの本音を初めてぶつけてくれた——そんな、気がした。

城へ帰る時迷わないようにと繋がれた手が震えたのは、きつと気の所為じゃない。

その後も、彼は変わらなかった。守るとも、助けるとも言わないけれど、同じく嘘も言わない。一緒に訓練をして、闘って。気付いた時には、自分で自分を殴りたくなった。出来なかったから、鏡の中の自分を思い切り殴って手を切って。馬鹿みたいって、笑って泣いた。

あたしはこんな最悪な世界で、最低な国で、その国を守る立場の男の人を自分よりも何よりもずっと大切だと思ってしまった。こんなことは、生まれて初めて。

今でも思う。どうしてあたしはあの人を好きになってしまったんだろう。それが全ての間違いだったと、痛いほど思い知ることになる。

本当に、どうしてだろう。あの時あたしは、王女様が時々彼を悲しい位に見詰めていることにも気付いていたはずなのに。

好きなんだ、と目が言っていた。本音を伝えられないのだと、そうも言っていた。口に出されないのをいいことに、あたしは何もしらない振りを続けた。

魔王を倒し終わったらあたしは元の世界に帰してもらおう。それで2人はあたしのいない場所で幸せになったらいい。それまでは貸してもらうつもりでいよう。本気でそう、思っていた。嘘じゃない。少なくとも王女様のことは、本気で信じていたんだよ。

あたしを苦しめたりしないって。騙したりなんてしないんだ、って。

だから、魔王を倒す旅に出るときだって、笑顔で城を出れたんだよ。なのに。

長い旅の果てに、戦いに戦いを続けて、不気味な城ごと魔王を打ち滅ぼした次の日の夜。

これ以上黙っているのは忍びない、と吐きだされた王子様の話は、魔王との戦いで投げられた刃物よりも、ずっと深くに突き刺さった。

帰れない、なんて嘘だ。

だって王女様は、何でも願いを叶えるって言ったじゃない。あんなに優しくしてくれたのに。全部全部、演技だったなんて。勇者召喚をしたのは神官とかじゃなくて、姫様本人だなんて信じられない。勇者召喚の力が、王を継ぐための条件だなんて信じない！

あたしが苦しくて、辛かった夜に来てくれた姫様が。ただ勇者のあたしを死なせないために慌てて部屋に駆け込んだだけ、なんて。

「何故あの子に君の気持ちが全て筒抜けなのか、今まで不思議に思わなかったのかい？」

王子様は、苦しそうな顔で言った。

「君と姫は、魂が繋がっているんだよ。お互いが城内に入れば手に取るように感情が伝わる。居場所もね。召喚と同時に掛けられた魔術の効果さ。日頃、罪人に使われる代物だ」

嘘だと言って、王女様。

大急ぎで城に戻って、旅の汚れを落とすよりも先に王女の部屋へ飛び込む。ねえ、嘘だよ。元の世界に帰れないなんて。あたしを召喚したのが姫様だなんて嘘だよ！

答えは、聞かずとも分かった。

まだ何もしゃべっていないのに、王女様の白い頬が見る見る内に青ざめた。

頭の中が真っ白になって。茫然としたまま体を綺麗に洗い流されドレスを被せられる。見覚えのある部屋に連れ込まれ、あたしはゆっくり顔を上げた。豪華な椅子の上で、おじさんが偉そうにふんぞり返っている。

「さあ、勇者よ。国を救った君には望む物を与えよう。地位か？金か？何が欲しい」

王様の目は、どこまでもあたしを見下していた。隠していただけで、姫様もあたしをあんな目で見ていたに違いない。あたしは映画でみた意地の悪い猫みたいに、にんまり口の端っこを吊り上げた。優しい顔した、大嫌いな王女様。あたしを魔王と戦わせて夢だけみせて、自分だけ幸せになるなんて許さない。

幸せになんて、させるもんか。

「旅に一緒に来てくれた、王女様付きの騎士様をあたしにください」

あたしの望みが意外だったのか、王様が目を丸くする。皆が騒ぎ出す中、視界の隅で王女様がぐらりと傾く姿が見えた気がした。

2（後書き）

お気に入り登録してくださった方が！読んで下さりありがとうございます！
います！終了まで頑張りますね。

勇者を呼びだした王女の話 1

私達王族は、この世界の唯一神を祭る神殿と深く関わっている。名目上神殿の長は司教となつてはいるが、その司教は私達王家の認証を経て定められる者だ。反対にこの国の王はある能力を神殿に認められた人間でなければならない、と定まっていた。

その能力とは――異界から聖なる力を持った聖人を呼び寄せる召喚の能力だ。

「よく聞くんだ、私の愛する娘」
父は事あるごとに繰り返しておっしゃった。

「いつかこの国が窮地に追い込まれた時、お前はその力を持つて聖なる人を呼び寄せる大事な命を持つて生まれたんだ。故にお前は王となる。お前の体はお前だけのものではないのだよ。王とは、国全ての命を背負つて生きるものだ」

国全ての命を背負う。

成長するにつれて、その言葉の意味を理解せざるを得なくなった。私の言動1つで誰かの生死が左右される。情けをかけた結果余計に傷を負わされたり、行動の遅れのあまりに目の前で救うべき命が奪われたこともあった。

それを避けるにはどうするか。徹底的に、情を削ればいい。ただし理的に、冷静になって目の前の現象を見る。ただし情をかけていないことを相手に悟られてはいけないのだ。柔らかい微笑みを浮かべ美しく扇を広げながら、その影で唇を一文時に引く。

王という生物は、得てして人間の大事な部分を削られてしまう者だ。王としての生き方を知れば知るほど、呼吸の仕方を忘れそうに

なる。そうして気付くのだ。私は息さえしなくても、生きていくことが出来る。王と呼ばれて、いつか父王の座る豪華な椅子に腰を下ろす。

そこに“私”という人間がいたことは、誰も覚えてはくれないのだろう。

あれは、いつのことだったか。暴動を起こした村への対応に奔走し、疲れきって早目に寝台に縋りついた夜だ。ふと目を覚まして窓を見上げると、濃紺の夜空から黄金色の月が浮き上がるように輝いていた。まるで夜の気配に、一端でも飲まれまいとするように。

独りだ。あの月も、私も。

手を伸ばせば何もかもが手に入るような気がした。

豪華絢爛な城ではなく、絵本に出てくるようなこじんまりとした可愛らしい家に。張り付けた笑みの人々に囲まれ長いテーブルの端で佇む家族ではなく、いつでも私の髪を撫でってくれる両親と兄が。目を潰さんばかりに輝く、重い金の王冠ではなくささやかなシロツメクサの花冠を。

窓を大きく開け放ちテラスに出て手を伸ばした。そうだ、飛び降りてしまえば。私は鳥ではないから、空を飛ぶことは出来ないけれどここから逃げ出すことは出来る。私をここへ縛りつけようとする何もかもからこの身を開放させられるのだ。

手すりは私の胸ほどの高さがある。部屋から椅子を音を立てないよう慎重に運ぶと、ゆっくりと下ろした。椅子に上り階下を見下ろすと、先ほど覗いた光景よりもずっと高い所に居るような心持になる。闇に包まれた庭は、私が飛び込むのを待っているようではないか。思わず足から力がぬけ、体が傾きそうになる。今から飛び降り

るというのに、体は地面が恋しいと震えているなど。苦笑を浮かべ、目を閉じた。

これで終わり。

手すりに足をかけて足を蹴り出そうとした瞬間、「馬鹿野郎！」という叫び声と同時に、体が地面に叩きつけられた。体の痛みと突然の大声に茫然としていると、ぱんと弾けるような音がして再び床に倒れ込む。頬を打たれたのだと気付いたのは、目の前に男が傳いて謝罪の言葉を口にしてからだった。

「護衛の身にありながら王女様へ傷を負わせてしまい、真に申し訳御座いません。こうなれば私は処罰を待つ身。この際だ……もう、言いたいことを言わせてもらう」

夜空に溶け込む髪をした、凜々しい顔の男だ。相對するだけで父様とは違う、他人を気押す圧迫感を与える。一体どれ程の戦場を駆け抜けその手を血に染めたのか。そう言えば、私の近衛隊が最近組み直された時に隊長だと紹介されたのが、彼だったような覚えがある。

王女である私を前に、彼は憎々しげに眉を寄せ、吠えた。

「こんなことで自殺か！？ 馬鹿かお前は！ さも自分が世界一不幸で居るような面しやがって」

獣が目の前に降り立ったかのような。普段なら委縮してしまうだろう男の険相にも、ひるむことはなかった。覚悟を決めて旅立とうとした、私の心そのものを他人に否定されること、それだけではどうしても許すことが出来ない。先ほどとは違い怒りに震える手で汚れたドレスの裾を握り締めた。

「黙っていても素敵なドレスを着て、食事を食べ、生活出来ることは恵まれた生活だと。そんなことは、幼い頃から承知しています！」そう。恵まれた生き方をしている。私は自らにそう言い聞かせて今まで努力を続けたのだ。王女として、次期王として。その重みは、背負ったことのある人間にしか解らない。

「だから何だと言うのですか！ 私の苦しみなど、あなたに解るはずがないでしょう！」

反論出来るはずがない。そう思っていたのに、男が驚いて目を丸くしたのはたった一瞬のことで、すぐに鼻で笑って私を睥睨した。

「その考えが馬鹿だと言っているんだ、恵まれた王女様」

「なっ……！」

「あんたの苦しみなんぞ他人が解るわけがないだろう。お前自身が、何も言わないからな。周りの奴らはな、お前と違って特別な能力なんざ持っていないんだよ」

かっとう自分の顔が赤く染まるのを感じた。一方的に罵倒されている、といきり立つ自分の片隅で小さく声が上がる。確かにそうだと。横柄な態度で腕組みし、男は口角を吊り上げた。先ほどまでの激昂した姿が嘘の様だ。その眼差しは、まるで幼い子供でも見るように優しくかった。

「解るな？ 少なくとも今お前の目の前には、解決策が一つ転がっている。あんたの勇気が足りないばかりに、取らなかつた方法だ。それを見逃して死んでみる、少なくともドア前にいる近衛と、今日お前の世話をしたメイドは皆揃って首から上とおさらばだ。お前、さっきそこまで考えたか？」

「あつ……！！」

私が王族であること、その重さを誰よりも承知しているはずだったのに。手すりに足をかけた瞬間よりも強い恐怖が足先から全身を駆け抜ける。震える手を持ち上げて、胸元で両手を結んだ。私は王女で、次期王で、彼らは私を守るためにいる。もし私の自殺に気がつかずにみすみす死なせていたらどうなるかは、想像に難くない。彼が口にしたことよりも凄惨な罰が待っているに違いない。

愚かにもこの立場から逃げ出したいと願った、馬鹿な王女のために。

「……っ、ごめんなさい、私……貴方達まで」

「あー……王女様、私に謝罪は不要です。とにかく早いうちに頬を冷やしましょうか」

男は苦笑し頬を搔くと、背後を振り返り「もういいぞ」と声を出した。とたんに盛大な音を立てて扉が開き、我先にとメイド達が部屋へ傾れ込む。その後ろで近衛の2人が一礼し、扉を閉じるのが見えた。

傷はどこだ、傷は浅いかと騒ぎながら私の手を取り、ドレスの裾から覗く足を観察する。私の頬を見たメイドがわたたと頬に濡れた布を押し付けた。その布は濡れてこそいたが、生温い温度になっていた。まるでついさっきまで誰かが握りしめていたように。思わず声を上げて笑ってしまい、メイド達が困惑げに動きを止めた。

私の浅い悩みは既に気付かれていたのだ。この男だけでなく皆に。

いつから？ 恐らく私が飛び降りようとするよりも前から。そうでなければメイド達が揃いも揃って化粧も落とさず待機していた理

由が説明出来ない。大声で怒鳴ったのも初めてなら、人前で口元も押さえずに笑い転げるのも初めてだった。

自分がこれほどまでに愚かだったとは、知らなかった。私のことを心から心配して、駆けつけてくれる人間がいることすら、気付きもしなかった。自分の身すら省みず、私を諭そうとする人間が、こんなに近くに居ただなんて。

「皆……、ありがとう、っ、御免なさい……」

こんな馬鹿な真似をして、愚かな自分にやっと気がついた。私が欲しいと望んだ物は真実、これほどまで身近に揃っていたのだ。恵まれた王女、男の言うことは、全て真実で。

メイド達は私と同じように頬に涙を伝わせ、礼をする。礼義に乗っ取りながらも、彼女達がその姿勢に込めた思いを私は確かに受け止めることが出来た。

改めて男に礼を言おうと顔を上げる。男は私達を見て、ふわりとほほ笑んだ。良かったな、と目が語る。ついさっきまでは憎たらしいと思っていたはずの男の笑顔に、何故か胸が高鳴った。益々赤く染まる頬を隠そうと、私は即座に視線を反らした。

あの夜私は、知ったのだ。独りでいることの孤独と、皆が居る幸福を。

だからこそ悪寒に目覚めた夜、私は躊躇いなくベッドを飛び出した。着ている物が夜着一枚だろうと、護衛を置いてきてしまっていることも気にせず。同じ空を見上げ私と同じように孤独に喘いでいた少女の元へ。

私が何もかもを奪い孤独にしまった、哀れな勇者様の元へ。

勇者を呼びだした王女の話 1（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
どうにも話が短くならない。困りものです。

世界の危機、それは唐突に訪れる。突如現れた竜巻は北部にある国を丸々飲みこみ、たった一夜のうちに暗黒の城を築きあげた。何もかもが図書室の片隅に眠る御伽噺の通りだ。母親がベッドで子供たちに語る只の物語であつたはずの本が、現実に起こった物だと知っているのは王族や、私達に近い一部の貴族のみであつた。

まだ魔王が成つたばかりの今ならこの国だけでも片づけることが出来るかもしれないと騎士の中でも実力者が先だつて魔王領と姿を変えた国を訪れた。期待はすぐに魔王の手により崩れ去る。精鋭部隊は魔王の住むという城を目視で確認するまでは出来たものの、そこから命からがら逃げ出すことしか出来なかつたのだ。国に返つてきた兵士は僅かに四名。翌日に二名亡くなり、一名は心を病み自ら命を絶つた。最後の一名も、自ら動くことが出来ないほどの重症を負っている。

最早、私達に出来ることはたった一つしか残っていない。それが勇者の召喚——王の冠を託される者にのみ許された、奇跡の力。本来ならば王がやるべき儀式だったが父王自らが私を指名した。お前が今から知つておくべきことだ、と目を伏せて告げる。王の言葉の意味を知つたのは、召喚の儀を終えてからのことだつた。

世界を救う聖なる人。想像していたのは神の化身だ。この世界に降り立つた瞬間に何もかもを理解なさつて微笑みを振りまき、私達に平和と安寧を約束してくれることだろう、と。

魔法陣から現れたのは一見して私と同じ年頃の少女に見えた。見慣れない衣服を纏い、座り込んだままぼんやりと顔を宙へ向けている。いや、見た目は幼く見えても奇跡の力を有した勇者様だ。助け

を期待し、手を差し伸べる。私を見上げ茫然とした様子で辺りを見回し吐き捨てた。

「はぁ？何言ってるの」

私の後ろに控えた魔術師達から困惑の声が漏れる。四方や失敗かと。失敗ではない。これが正しい結果なのだと、招いた自分自身が誰よりも理解していた。縋るようにこちらを見る勇者様から顔を背け震える手を長いローブに隠す。

父はこうなることを、最初から知っていたのだ。先にこのことを知っていれば私が反対することも。召喚主を自分にしたのは、その責任を追及されることを逃れるため。

——勇者は、ただ異界で平穏に暮らしている人間だ。

そのうちの誰でも良い。彼らは皆この世界の民にない力を有しているから。勇者という、神に認められた人間など最初から存在しなかった。私が行ってしまったことは、勇者召喚などという崇高な物では無い。

私は今、平和で幸福な日常から一人の人間を誘拐してこの世界に閉じ込めたのだ。

少女を貴賓室へ案内させ、その足で父の元へ向かう。成功したことを告げると「そうか」とだけ答え、軽く目を閉じる。僅かに伝わる憐憫の感情は、次に目を開いた瞬間には消えていた。

「私はこれから、勇者を戦いに追い立てる悪役となろう。お前の立場は解っているな？」

「……はい」

一晚見知らぬ部屋に留め置かれ、少女は疲弊していた。穏やかで名君と名高い父王が、少女を蔑むように見据える。混乱のあまり叫ぶ声が直接心に刺さった。沢山の疑問符と、その中に交る棘に似た敵意と、恐怖。両手を胸の上で組み、必死に平静を装う。

勇者だから戦えと言う私達の声に、彼女が拒むのは当然のことなのだ。突然自分を誘拐した相手が、例え命の危機だからと懇願されたとて彼らを自分の命をかけて救おうとする奇特な人間がどこに居ると言うのか。私がその立場であっても、彼らの危機を喜びこそすれ絶対に助けようとは思わないだろう。

そうであっても、私達は彼女に闘ってもらう他はない。彼女がどれ程に傷つき倒れ、万が一命を落とすことがあったとしても。

王の近衛が少女に剣を向ける。恐怖に震え必死に頷く少女は、自らの首から伝う血にすら気付く様子がない。父が壇上で口端を噛みしめ、冷淡な声で退室を命じた。

少女は近衛に手を引かれるがまま、覚束ない足取りで部屋を出て行く。人払いをさせたたん、張り詰めた糸が切れたように体から力が抜けた。心臓が張り詰めそうに痛い。自分が確りと息をしているかすら解らず、壁に持たれ目を閉じる。

「苦しいか」

王が悲しそうな声で問う。私は小さく首を縦に振った。

苦しい。この苦しみで、命を落とすものではないかと思う程に。でもそれは私の苦しみではなく、勇者——あの少女の感じているものだ。召喚した者と、勇者との間につながりが出来ることは昔から聞いている。勇者と共に闘うために必要な力なのだと勘違いをしていたが、今は解る。これは戒めだ。私が一人の人間を不幸に陥れた確

かな証。この繋がりを持つて私は彼女が与えられた痛みや苦しみを
感じ取り、全てを肉体的な痛みとして与える。故に彼女が戦いで命
を落とした場合、傷の痛みこそ伝わらなくとも、死への苦しみと恐
怖は私の命も同時に刈り取るだろう。

勇者様が我が国とも神とも無関係なただの被害者であること、そ
して私の天命を握っていることを知っているのは私と父だけだ。近
衛にも、血を分けた兄にも知らされることはない。勇者様の死が次
期王の死に繋がると知っては、彼女に闘ってもらうことすら難しく
なる。まだ年若い彼女を無理やりに戦いの場へ引きずり出している
事実も、また国民や騎士達の反発を買うことだろう。

彼女はただ、天より舞い降りた勇者様として軍勢の戦闘に立つても
らわねばならない。それ故、彼女へ対する騎士達の態度が悪いこと
に気付いていながら私は何も出来なかった。

直接顔を会わせ手を伸ばす勇氣もなく、胸の痛みを必死に堪えて
過ごす日々。あの夜も、胸の痛みを薬で紛らわせ眠りについたはず
だった。

痛みは無かった。それどころか、体が僅かに軽くなったような気さ
えする。厚い雲が割れ、太陽の光が僅かに射し込んできた時の、こ
れから空が晴れ行くことに期待する感情に近い。この深夜に、何が
彼女の心を浮き立たせるのか。

嫌な予感がして、部屋を飛び出す。ドア前に居た護衛は慌てて私
を止めようとしたけれど、彼らに黙っているよう命じて階段を駆け
下り、彼女の部屋へ飛び込んだ。

少女は驚きに肩をはね上げ振り返った。命を絶てば救われるので
はないかと——同じように、思い立った自分と彼女の瞳が重なる。
気付けば必死に、彼女へ語りかけていた。どうにかして、未来へ希

望を持つてほしくて。生きてさえいれば幸せを僅かでも捕まえられるのではないかと。

魔王を倒すことと引き換えに、願いを一つ叶える。何と卑怯な誘いをしたものだ、と自分自身に呆れさえもした。少女の空虚な瞳に生気が再び戻ったのを見て安堵すると同時に、私は誓った。

何としても少女を元の世界に戻してみせる。父に反対されたとしても、必ず。

召喚術式から考えて、異界から召喚した勇者を元の世界に戻す方法はあるはずだ。まだ、召喚陣は使用したまま保管してもらっている。この陣はかつてつなげた空間をまだ覚えている。この魔法陣を上書きして使用し、治療の際布に染み込ませた彼女の血を情報として与えた。彼女の血族が今も異界で一人でも生きているというのなら、その血のつながりを辿ることで彼女を元の世界へ帰すことが出来たはず。

勇者様が鍛錬を重ねる裏で、私も必死に彼女の帰還方法を探る。この国では未だかつて、誰も編み出さなかった術式だ。理由はあまりにも単純で、非人道的な物。この国は今まで何度も、何度も世界の危機が訪れるたびに勇者を召喚し乗り越えてきた。

勇者様は直接的に被害を受けた地域を訪れ、血を流して戦う。そのために一般国民からの支持が熱くなる。彼らを我が国に取り入れられれば、必然的に国の支持率も上がるのだ。

彼らの未来を無慈悲に奪い、闘わせ、必死で築き上げたこの国での立場も利用する。何と卑怯な、と思う自分と王として当然だと思っ自分がせめぎ合う。

それでも私は彼女と約束した。王女だからでも、召喚主だからで

もなく、自分自身として勇者様を守り助けると。

勇者様を守るために私の近衛隊の中から幾人か選出したのも、約束を守るための1つだ。その中には彼の名前も入れた。あの夜私の命を救ってくれた隊長は、私の中で特別な人になっていた。彼ならば、きっと勇者様の助けになってくれるだろう。旅立つ前日、挨拶に来た隊長の手を取り心から願った。

「この国へ再び戻るその日まで、貴方が勇者様を御守りなさい」

無事な姿でここへ戻るその時も貴方が隣についているように。貴方も無事に戻ってこられますように。隊長は私の手に口づけをする、と、騎士の最上級礼をした。

顔を上げるように言えば、男は型膝をついたままゆっくりと顔を持ち上げ私を見上げる。肩に手をつき、素早く額に唇を寄せた。

「呪です。あなたが、決して私の命を忘れぬように」

茫然とした顔で私を見上げる男が、心から愛しい。この思いは口に出すことを許さないだろう。私が次期王である限りは。熱くなる目じりから涙がこぼれたさないうちに、自分が出来る最上の笑みで男を見送った。

私も彼らが居ない間に闘わなければならないのだから。

勇者は各都市を回り、魔を払いながら順調に魔王城への道のりを進んでいた。私の方も、問題なくとは言えないまでも壁を乗り越えながら帰還のための魔術を形にしつつあった。彼女達がとうとう魔王を倒したと連絡があった、その日のこと。私もようやく彼女を帰還させる術式を完成させた。

あとは、彼女の到着を待つばかりだったのだ。それなのに。

彼女が城下へ入ったという連絡があり、出迎えに行こうとした私の部屋に侍女が真っ青な顔をして飛び込んできた。息を切らしたまま、必死の形相で叫ぶ。

「神殿に賊が……っ、魔法陣を破壊されました！」

彼女を咎めようとした者達が、揃って声にならない悲鳴を上げる。頭の前からみるみる血の気が引いていくのを感じた。唯一無二である、魔法陣の破壊。それは今までの研究が全て無駄になったことと同意義であり、同時に勇者様の帰還が不可能となったことを意味していた。

王は、勇者を元の世界へ帰すことに反対していたが、必死に説得してようやく首を縦に振ってもらった。命をかけて世界を守った勇者から、我々が勇者自身の世界を奪って良いものかと訴え貴族達にも承諾を得たはずだった。彼女の帰還を妨げる者は最早居ないと、警備を緩くしたのが先週のこと。妨害など今まで一切なかったと言うのに。勇者が戻るこの日に限って、何故！

あまりの事に茫然とし過ぎて、私は真綿で締め上げるような、緩やかな苦しみに気付かなかった。ばたん、と盛大に扉が開けられる。ノックもなしに入ってきた人物にメイド達は反射的に警戒し、次の瞬間には顔色を変えた。

衝撃から抜け出せないままに顔を上げると、そこに居たのは紛れもなく勇者様だった。

外装は薄汚れ、頬には泥がついている。到着したその足でこの部屋までやってきたのだろう。私と目があつた瞬間、勢いよく感情の奔流が襲いかかってきた。

一度大雨が降った後の状況確認のために向かった村で見た、穏やかな川のなれの果て。全てを押し流さんとばかりに満ちた黒い水が、木々を飲みこみながら広がっていく、その中に自分が放り出されたような。

出発前まで、勇者様は私を心から信頼してくれていた。私も其れに答えようと努力した。それなのに、どうしたことが彼女の目は私に全く正反対の感情を伝えてくる。

強い憤りと、それすら飲み込む程の不安。

濁流の中で浮き沈みしながら、流れてくる巨木に打ちつけられるよ

うな息苦しさと痛みが体を襲う。どうして勇者様が私をそんな目で見る？一つの可能性に至り全身から血の気が引いた。

——まさか、勇者様は陣の崩壊を既に御承知で？

勇者様は、自分が生まれ育った世界へ戻りたいという当然でささやかな願いのために私達の世界を守って下さった。命を懸けて戦い魔王を滅ぼすという快挙を成し遂げ、やっとの思いでここまでの道のりをお戻りになった。

それなのに勇者様の世界への扉が永遠に閉ざされてしまった！私の配慮が足りなかったばかりに！

何も言えず、立ち尽くす私の前で勇者様は俯いた。その瞬間、どつと体中に重しを乗せられたような感覚に襲われる。

勇者様は何も言葉を発することはなく、身を翻し部屋を出て行く。靴から剥がれおちた泥だけが、彼女の来訪を示すように残された。罵られることも殴られることもなく、無言のままに。メイド達は勇者がそれ程怒ってはいないのだろうと慰めたが、心が繋がっている私には解っていた。

声すら出せない程に、彼女は怒り狂っていたのだ。その事実を彼女自身が目の前で証明してくれた。

望みの物を言えと王が促す。当然元の世界への帰還を願うものだと皆が思っていた。彼女は口元を弧にし、王座を見上げる。漆黒の宝石にすら見間違う、美しい瞳はただ漆黒が広がるばかりで最早輝きなど感じられなかった。

全身を茨で締めあげられるような痛みで呼吸も出来ず、意識すら朦朧とする。これは彼女の憎しみだ。彼女が誰かを怨む時の痛みよりも数段力が増している。彼女が、心から私を怨んでいた。単純な

好き嫌いという感情を超えてしまう程に強く、強く私が苦しむことを願っている。

体面すら保てず、その場で崩れ落ちそうになる私を騎士が支えた。理由が解らずとも私が苦しむ原因が勇者だと感づいたのだらう、側控えの者達が一斉に勇者を睨む。

止めて頂戴、私が全て悪いのだから。勇者様にそのような目を向けては……

「旅に一緒に来てくれた、王女様付きの騎士様をあたしにください」

勇者様の一声で、思考が停止する。あの方を？弱弱しく顔を上げ、勇者を見上げる。彼女は笑っていた。弱者を踏み潰す強者のような顔で、残忍に。あんな風に笑う娘では無かった。照れたように笑う優しい、純粋な娘だった——あの笑顔すら、私が奪ってしまったのか。

止めを刺すがごとく与えられた痛みに、私はとうとう意識を失った。

そして、勇者はあの方の妻となった。

勇者様は王宮から出ることなく、敷地内の離宮で生活を始めた。これは王家からの願いではなく彼女のたつての希望だ。彼女の本意は、言わずとも解る。彼女の住む離宮は、私の住む区画から庭を挟んで向かいに立っていたのだから。

彼女は私があの方を想っていたことを御承知で、故にあの方を望んだ。

時に見せつけるように庭を歩き、連れ立って面会に現れたこともあった。まだ私の近衛であるはずなのに彼女の勝手な理由で勤務を放棄させたり、勤務から外させたりという暴挙まで起こす。最初は同情していた近衛やメイド達も、彼女の行動にすっかり批判的にな

り、私を庇って彼女へ敵対するようになってしまった。

勇者が今日も面会に来て、帰っていく。彼女が歩き去る背中を見送ったのち、メイドが私の顔を見て目を見開いた。ぽたりとドレスにしみができて、初めて自分が涙をこぼしているのだと気付く。素早く布を手渡され、顔を上げればメイドは揃って向こうに敵が居るとばかりにドアを睨みつけていた。

私が今泣いているのは彼女の所為ではない。確かに彼が他の女性を連れ立っている所を見て平静ではいられないが。

僅かな動揺を殺す私を蔑み笑った勇者様が、心の奥で泣いていることに気付いてしまったからだ。私を傷つけたい、苦しめたいという感情が同時にあの心優しい勇者様を傷つけている。私など、心から憎まれても仕方がないというのに。

あの優しい娘を、これ以上苦しめたくはなかった。だから多少私が傷つく姿を見せる程度のことにはさせてやりたかったのだ。だから何も言わずに、傷の痛みを紅茶と共に喉奥へ流し込んだ。

それが間違いの一つだったと、後々気付かされることとなる。何故あの時私は彼女と向き合うことを避けたのか。悪いと思っていたのなら、地に頭をつけて謝罪をすべきだったのだ。ただ娘の言動を拒まないことしかしなかった私は、次期王家としての自分の立場をすっかり見失っていた。

ある時は夜会の一興として、ある時はお茶会の話題として貴族達の間にある噂が密やかに広がる。姫様を怨んだ勇者が王女の密やかに好意を抱いていた相手を悟り、恨みを晴らす一念で奪い取ったのだと。

聖国で力ある貴族達程、王女の尽力を知っていた。彼女が何度も頭を下げ、勇者の帰還を目指して皆をまとめ上げたことに評価もされている。確かに彼女は不幸だったと言えるが、魔法陣の崩壊は姫の手による物では決していない。勇気ある何人かの者が勇者様へ直訴したそうだが、彼女は一貫して貴族達の言葉を信用しなかった。

何故そこまで、王女を怨むのか。彼女の力あってこそその勇者ではないのか。誰よりも勇者を尊び、敬愛し守ろうとした王女に対するその仕打ちは、決して許されるものではない。

勇者を排そうとする貴族が現れるのも、時間の問題であった。

その裏で広がる噂がもう一つあった。これは貧しい街を中心に、次第に範囲を広げ都市部にまで伝わる。伝達したのは、主に旅人や商人達だ。彼らは人の集まる酒場や、広場で盛大に話をしそれぞれに怒りをぶちまけあった。

勇者は魔王を倒すため、直接的に魔王城へ向かうのではない。各都市を回り襲い来る魔獣達をその腕で蹴散らしてきた。普段は大きな図体で威張り散らす兵達が蜘蛛の子のごとく逃げて、彼女だけは逃げずに闘い民を守ってみせた。

感謝すべきは国でも召喚した王女様でもなく、目の前で闘った勇者だ。

その勇者様が王女に騙され戦わされていたのだという噂。

彼女は他人を傷つけることを厭う、心優しい娘だったが神の国から無理やりに連れ出されこの国へやってきた。何度願っても神の国へ帰されず、魔王さえ倒せば国へ帰してやるという王女の願いに少々頷き戦いに身を投じたそう。ところが魔王を倒したところで、国へ帰る方法など最初からないと知らされたらしい。旅の途中で勇者に心を奪われた王子が、良心の呵責に耐えきれなかったのだとい

う話。

そして今彼女は王都で貴族達に疎まれ酷い目に合わされている、と。

元々あった国への不満が勇者を苦しめる国への怒りと合わされ、増長する。王女も勇者も知らない所で、聖国崩壊への火種がくすぶり始めていた。

3 (後書き)

読んで下さりありがとうございました！

6話で終わりそうもありません…… or z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031x/>

（仮）悪いのは誰？

2011年11月13日10時09分発行